

大学生におけるセクシュアル・マイノリティに関する調査結果

○福本彩乃¹・山本真由美²

(¹徳島大学大学院総合科学教育部・²徳島大学大学院社会産業理工学研究部)

問題と目的

人間の性のあり方(sexuality)において、多くの人は、身体の性と心の性が一致しており、かつ恋愛や性的欲求の対象が異性である。このような人々のことをセクシュアル・マジョリティと言う。それに対して、セクシュアル・マジョリティに属さない人々のことをセクシュアル・マイノリティと言う。セクシュアル・マイノリティを扱った研究は以前から行われているが、同性愛や性別違和のように対象を限定したものが多く、その他のセクシュアリティについてはあまり触れられていない。そこで本研究では、より多くのセクシュアリティを含めた質問紙を用いて、大学生を対象に調査を行った。

方法

1. 協力者：徳島県内の A 大学に通う学生 273 名
2. 手続き：質問紙調査を実施した。
3. 質問紙構成
 - 1) デモグラフィック要因（年齢、学部）
 - 2) 知識を測る項目
 - 3) 接触経験を尋ねる項目
 - 4) 態度を測る項目：和田（1996）の作成した同性愛尺度（48 項目、5 件法）を参考にした。
 - 5) 自身のセクシュアリティについて尋ねる項目

結果と考察

1. 調査協力者の内訳

調査対象の学生 273 名のうち 253 名の回答を分析に用いた。戸籍上の性別が男性である者は 43.1%、女性である者は 54.9%、未回答が 2.0%であった。そのうち、自身の性別を戸籍上の性別と同じだと認識している者が 99.2%、そうでない者が 0.8%いた。自分自身を異性愛者だと思ふ者は 88.1%、そうでない者は 9.9%、未回答が 2.0%いた。

2. 態度における性差の検討

セクシュアル・マイノリティに対する態度を測る項目を因子分析にかけたところ、「容認度」因子、「心理的距離感」因子、「ステレオタイプイメージ」因子が抽出された。次に、セクシュアル・マイノリティに対する態度について性差があるのかを

検討するため、因子ごとに t 検定を行った。ここでの性別は自身で認識している性別を用いた。その結果、全ての因子において男女の間に有意差が見られた（「容認度」 $t(228)=-4.074, p<.001$ 、「心理的距離感」 $t(228)=4.746, p<.001$ 、「ステレオタイプイメージ」 $t(228)=4.340, p<.001$ ）。女性の方がセクシュアル・マイノリティを容認しており、男性の方がセクシュアル・マイノリティに心理的距離感とステレオタイプイメージを抱いていることが明らかになった。

3. 態度と知識の相関

セクシュアル・マイノリティに対する態度と知識量の相関係数を算出したところ中程度の相関が見られた(表 1)。知識がある者ほどセクシュアル・マイノリティに対する容認度が低いという、先行研究とは異なる結果であった。そこで性別の影響を調べるために t 検定を行ったところ、知識量に有意差が見られた($t(228)=4.712, p<.001$)。男性の方が知識量があるにも関わらず、セクシュアル・マイノリティに対する容認度が低く心理的な距離感を抱いていることが明らかになった。

表1 セクシュアル・マイノリティに対する態度と知識量との相関

	知識量
容認度	-.355**
心理的距離感	.377**
ステレオタイプイメージ	.217**

** $p<.01$

結果の男女差については、男性の方がステレオタイプの性差観を持っていることが明らかになっており(東、1990)、男性の方が、男性は男性らしく、女性は女性らしくあらねばならないという考えを持つ傾向にある。そのため、既存の概念に当てはまらない同性愛者やトランスジェンダー、X ジェンダーなど、セクシュアル・マイノリティに対して距離を置いてしまうのだと考えられる。今後は、ステレオタイプの性差観を払拭し、多様性や人それぞれの違いを認めていくための介入方法について検討していきたい。